程乃珊の『青い館』を読む

福地桂子

一、はじめに

程乃珊の小説で、初めて読んだのは『人民中国』に掲載された『年越しのパーティー』（《女児経》、原題を生かせば『女大学』と訳せるだろう）である。適齢期を過ぎようとしている美人三姉妹の結婚問題が題材で、解放前、上海の名門女学校を出た母親の気位の高さが娘たちの婚期を遅らせている。このように紹介すると、日本にもざらにある題材ではあるが、それぞれがやはり文革の影を引きずっている点は中国独特の問題であり興味深かった。あれだけの革命をくぐり抜けてきたにもかかわらず母親のブチブル思想は少しも変わっていないし、さらに子供たちにも強く影響し、経済開放政策のなかで復権しているのを知って、中国革命は何だったのかと考えさせられ印象に残った。

しかし、「当代文学研究会」で程乃珊が取り上げられた機会に改めて調べてみると、上海ではかなり注目されているが全国的にはそれほど関心を持たれていないようである。小説選集等に収録されている作品は極めて少なく、《藍屋》が《中篇小説選》に、《女児経》が《＜中篇小説選刊＞獲奨作品集》に、《簽證》が《＜小説界＞獲奨作品集》に収録されている程度である。日本ではさらに関心が低い。調査不十分ではあるが、調べた限りでは、岩佐暲彦氏による《洪太太》の紹介[c-29]があるのみで、日本人の手になる翻訳は一作もない。

程乃珊への入り口として、まず初期の小説で最も評価されている『青い館』（《藍屋》）を読んでみた。

二、熟知している世界を描く

程乃珊の経歴をを簡単にまとめると、[c-42~47] １９４６年上海生まれ。祖父は解放前の上海の著名な銀行家。１９４９年一家で香港に渡り、幼少期は香港で過ごす。１９５６年両親と上海にもどり、上海の中学に進学。さらに上海教育学院に進み、卒業後は中学校の英語の教員となる。１９７９年、処女作、短編『お母さんに教わった歌』（《媽媽教唱的歌》）を発表。１９８３年上海作

家協会に参加。現在は香港在住ということである。

程乃珊は「作者は自分が熟知している生活について書かねばならない。熟知していなければ情感が出ないし、情感が出なければ展開できない」B-29と考え、処女作『お母さんに教わった歌』をはじめ、初期の短編では作者と同じ解放後に育った若者を主人公とした小説が多い。なかでも『女大学』はそれが成功していて、性格の違った三姉妹のそれぞれの結婚感が生き生きと描かれている。

しかし、程乃珊は解放後世代を書くことだけを目標にしているわけではない。「私の生活範囲は狭く、小さいころから大きくなるまで都市を離れたことがないし、私を生み育ててくれた範囲内から一歩も出たことがない。しかし、私の生活範囲をあまりによく知っていて周囲の人々や物事を深く愛しているためにあの十年は特に苦しんだ。なぜなら、そのころ朝から晩まで聞こえてきたのは"一線を画す"というスローガンだったが、私にとってこれらすべてと"一線を画す"ことは月に行くより難しいことだった」B-29と言いっているように、自分の育った環境をだいじに思い、上海の経済発展に寄与した祖父の世代、中国革命を体験をした父の世代、解放後に成長した自分たちの世代と激動の中国を生き抜いてきた三代記を書こうとしている。すでに「『子夜』や『上海の朝』に継ぐ上海の民族ブルジョア階級の生活を題材とした長編小説」C-37と評価される『遥かなる道を望む』（《望尽天涯路》、後に《金融家》と改題）を発表したが、これは第一部であって、「全体を三部に分け、３０年代から８０年代にかけての、上海のある大家族の半世紀の風雪を描く」B-87壮大な計画を進めている。『青い館』はその原型といえる。

三、『青い館』の登場人物

顧福祥：１９８８年生まれ。１３才のとき、田舎から上海に出てきて苦労するが、第一次世界大戦による鉄不足を利用して利益をあげ、２６才にして上海屈指の金持ちになり、「鉄鋼大王」と言われるまでに成功した。３５才でドイツ人の設計になる豪邸をフランス租界に建てた。外壁が青い煉瓦で築かれているため人々に「青い館」と呼ばれ評判になった。やりかたは強引で、箔を付けるためにこれまで苦労を共にしてきた妻を離縁し、上流階級出身の女性と再婚した。そのため、最初の妻を自殺に追いやった。最初の妻との間に長男鴻志、次男鴻飛、後妻との間に三男鴻基がいる。

鴻志：１９１０年生まれ。アメリカに留学し、そのままアメリカで暮らしている。

鴻飛：１９１４年生まれ。生みの母とは１１才の時離別。母を死に追いやった父に反感をいだいていたが、２８才のとき（文中矛盾がある）看護婦芬との結婚を反対され、ついに家を出る。薬を買えなかったため、長女を２才で病死させるという不幸はあったが、そして今も新婚当時以来のわずか２５平方メートルの狭い部屋にしか住めないような貧しい暮しをしているが、やさしい妻と工場の研究室勤務の息子と３人で、中学校教員の仕事に打ち込んできた自分の半生に誇りを持ち、精神的には満ち足りた日々を送っている。文革も父と絶縁していたため攻撃はそれほど激しくなかった。鴻基に追い出され、行き場を失った父を優しく受け入れ、その最期を看取り手厚く葬った。長い間往き来のなかった弟が突然訪ねてきて招待してくれても、招待を受ける気などまったくなかったが、市政協委員に推薦されると、幼少期を過ごした「青い館」を訪ねてみる気になる。家を出るとき、父の百倍の金持ちになったらもどってくると言ったが、自分の生き方が市政協委員というかたちで認められたから。

鴻基：１９２５年生まれ。兄たちが家を出たため、父のすべての財産を引き継いだ。しかし、それが災いして文革中はひどい目に遇う。そして保身のため、迫害され衰弱しきっている父を追い出し、葬式にも顔を出さず、墓のありかも知らない。文革後は「青い館」は返還され、貯金も凍結を解かれ、裕福に暮らしている。最初は次兄を尊敬していたが、父の財産の唯一の後継者になって経済的に優位に立ってからは貧乏な鴻飛を見下し全く没交渉である。最近、長兄から一時帰国するという手紙を受け取ってあわて出した。にわかに父の墓のことが気になり、急に親戚面をして次兄を訪ね「青い館」に招待する。そして、鴻飛の息子伝輝名義の１万元の預金を提供して墓の所在を聞こうとする。

伝輝：１９５５年生まれ（推定）。教養ある両親の指導のおかげで、文革後大学に入ることができ、今は計器工場の技師という比較的恵まれたポストにいる。それに、ハンサムだし、教養はあるし、女性にもてるタイプだ。しかし、経済開放後、教養ある男性よりも経済力のある男性の株が上がってきた。大学時代の恋人は、風采は上がらないが家と財産のある男に走ってしまった。母親の退職によってやっと仕事にありつけた研究室の雑役係りの朱までも、長い間連絡のなかった父親が最近海外から帰ってきたとかで、急に羽振りが良くなって、仕事も休んで遊び回っている。そんなある日、父からは聞かされていなかった祖父のことを知り、清貧に甘んじている父をうらめしく思う。また従兄の伝業を知り、「青い館」にもどりたいと思うようになる。同じ工場の知的な女性白虹を愛するようになっていた伝輝は新居が欲しかった。そこへ叔父からの

招待である。この願いが現実の問題として進展するのではないかと期待をふくらませ、父について初めて「青い館」を訪問する。しかし、叔父が兄弟の間なのに父に対し金で取り引きしようとしているのを知って自分の非を悟る。副司令の父の威光を借りずに、自立して生きていこうとしている白虹は、金持ちの親戚との付き合いをありがたがる伝輝に失望し離れていく。叔父がくれるという１万元を受け取るかどうかは自分で判断するように父に言われるが、「５千元で室内装飾をし、家具類を揃え、残りの５千元を銀行に預ければ利子でのんびり暮らせる」しかし、「自分は両親の貴い年月を売り渡すほど卑劣な人間にはなっていない。そんな金をもらったとしても誰とこの喜びを分かちあえるだろう。両親は決して喜んでくれないし、そして白虹とは二度と会えなくなる」と考えきっぱりことわる。そして自分の専門の仕事に真面目に取り組むことによって彼女の心をとりもどしたいと考える。

鴻基の息子伝業：３０才も越えているというのに、仕事をするでもなくぜいたくに遊び暮らしている。しかし、物質的に恵まれた生活にも退屈し伯父を頼ってアメリカに渡り、祖父のように大事業を起こしたいなどと非現実的な夢を見ている。

四、文革後返還された財産

以上登場人物を紹介したが、小説は三代目の伝輝の目を通して語られる。

作者と同じ解放後世代より、二代目鴻飛についての記述がいちばん多い。作者が「私はやはり私たちの前の世代の青年を極力表現したい」「彼らの話しの中から、あるいは文革後返還された彼らの大学時代の年次刊行物から、彼らもかっては血気盛んな国を憂え民を思う青年であったことを知った。ただ、人には人それぞれの道がある。彼らは旧社会で必ずしも解放区に駆せ参じたり、地下の党に参加したりしたわけではないが、新中国の誕生に際しては力の限り新生活のテンポにぴったりとついていった」B-29と賛えて、だいじに思っている父の世代の人物である。平凡な教師ではあるがどんなに困窮していても父の財産をあてにしない自立した、そして人としての暖かい心を持った人物として描かれている。

このような理想的人物鴻飛を、弟の鴻基と対照させることによって、主題は“精神か物質か”という問題に絞られている。「青い館」を訪問したとき、鴻飛が「若い者が……この凝った家に住むのは適当ではないだろう。君たちはたいへんな代価を払うことになる」というと、鴻基は「不動産税が高くなった。

４半期で４００元近くも取られる」とあいづちを打つ。鴻飛はこんな家に住んだら精神的にだいじなものを見失うと言いたかったのだが、鴻基は全く理解できない。

“精神か物質か”というテーマは文革後、張賢亮の『霊と肉』や映画『逆光』をはじめ、多くの文芸作品のテーマになっているが、この小説を読んで上海には文革後返還された財産や海外の親戚からの送金で、一度に大金持ちになった人がいかに多いかということを改めて感じさせられた。このような金を手にした場合、伝業や朱のような若者が出現するのも当然だし、伝輝が「青い館」に憧れるのも無理もない。罪もない人を攻撃し、財産を奪って塗炭の苦しみを嘗めさせ、ある場合は死に到らせておいて、今度はその財産を返還してその子供たちを駄目にしている。政治の非情さを感じさせられる。

この問題に関連して思いださせられたことがある。１９６５年上海に旅行したとき、南京路の商店の看板には“公私合営”という文字が多く見られた。そのとき、「資本金は凍結されているが、もとの経営者に資本金に対する利子を払っている。二代目が自らすすんで国家に寄付するまで没収はしない」という説明を聞いて感心したものだったが、１９７７年に行ったときにはその文字は全く消えていた。あの商店主たちも鴻基と似た運命に遭遇したことだろう。

程乃珊は香港からもどり、新しい中国で精神的に自立した人間として生きようと努力したにちがいない。しかし、「我が家の旧宅も依然健在で街角に堂々とそびえている。それはもちろん今ではもはや個人の住宅ではなくある政府機関として」B-25といった記述から、解放前の上海第一の銀行家の家に生まれた過去を懐旧する気持ちを完全に捨てきれないでいるのが感じられる。それは「青い館」の応接間の描写にも感じられるし、鴻飛が貧乏していてもコーヒーには凝っているとか、ダンスは若者の伝業よりよほど優雅に踊るといった描写は、解放前に身につけた上流階級の教養をいささかほこりにしている感じがいなめない。そのような作者にとって鴻飛は理想像であり、伝輝の最後の決意は作者のその当時の決意であろう。

程乃珊作品目録（未定稿、＊は２次資料）

A、单行本

1	《天鹅之死》（短編 6編）	江苏人民出版社	1982.2	＊
2	《蓝屋》（中編）	百花文艺出版社	1984.4	＊
3	《丁香别墅》（中編 4編 短編 9編）	上海文艺出版社	1986.4	＊
4	《女儿经》（中編 4編）	花城出版社	1988.5	
5	《豪门怨》（長編）			＊
6	《你好，帕克》（散文37編）	上海文艺出版社	1989.9	
7	《金融家》（長編）	上海文艺出版社	1990.10	
8	《让我对你说：寄自灵魂伊甸园的信扎》	四川人民出版社	1992.1	＊
9	《上海生死劫》（翻訳）	浙江文艺出版社	1988.9	＊
10	《银剑草》（翻訳）			＊
11	《福乐会》（翻訳）			＊
12	《蓝屋》（中編）	台湾新地出版社		＊
13	《签证》（中短編集）	香港明窗出版社	1986or1987	＊
14	《香江水，沪江情》（散文集）	香港麟麟书屋		＊
15	《程乃珊小说选》（英語版）	熊猫出版社	1988	＊
16	《程乃珊小说选》（仏語版）	熊猫出版社	1989	＊
17	《调音》（英語版）	アメリカ		＊

B、雑誌、单行本所収

1	妈妈教唱的歌	《上海文学》1979-7	
2	天鹅之死	《写作参考》1979	＊
3	欢乐女神的故事	《儿童时代》1980-12	
		《中国新文学大系1976-1982 儿童文学集》中国文联出版1986.2 所収	
		“上海首届儿童文学园丁奖的优秀作品奖”受賞	
4	黄丝带		＊
5	摩登娃娃的故事		＊
6	呼唤	《文汇月刊》1981-4	
7	蚌	《上海文学》1982-1	
8	尴尬年华	《文汇月刊》1982-3	
9	父母心	《钟山》 1983-1	＊

10 调音　　《上海文学》1983-2
11 小松鼠　　《新港》　1983-3
12 归回　　《奔流》　1983-12
13 喷水里的三枚银币（中編）《小说界》1982-4
14 蓝屋（中編）　　《钟山》1983-4.　《中篇小说选刊》1983-6 所收
《1983年中篇小说选 1 》人民文学出版社1984. 5 所收
“首届上海文学奖”，“首届钟山文学奖”，
“首届上海青年敦煌文学大奖”受賞
15 蓝屋（テレビドラマ）　　*
“金鹰奖”受賞
16 我和《蓝屋》　　《中篇小说选刊》1983-6
17 当一个婴儿诞生的时候（中編）　　*
18 穷街（中編）　　《小说家》　1984-2　　单行本《女儿经》所收
“首届上海青年敦煌文学大奖”受賞
19 穷街（テレビドラマ）　　*
“第一届上海文学艺术奖”、“金鹰奖”、“飞天奖”受賞
20 黄然苇　　*
21 黄然苇（テレビドラマ）　　*
22 丁香别墅（中編）　　《上海文学》1984-5
23 丁香别墅（テレビドラマ）　　*
24 平•克劳斯贝在我们家　《艺术世界》1984-5.　单行本《你好，帕克》所收
25 关于创作的思考—给李子云的回信　《读书》1984-8
《昨日风景》浙江文艺出版社1991. 12　所收
26 走出《蓝屋》的人们　《萌芽》　1984-7
27 穷街使我成熟—谈谈中篇小说《穷街》的创作　《文汇报》1984. 10. 20　*
28 我的起步　　《东海》　1985-1　　*
29 也谈“发挥”—答张贤亮同志　《女作家》1985-2
30 幸福的女人　　《青海湖》　1985-3.　单行本《你好，帕克》所收
31 女儿经（中編）　　《文汇月刊》1985-3.　《小说月报》1985-6 転載
《1985年《中篇小说选刊》获奖作品集》海峡文艺出版社 1986-12 所收
单行本《女儿经》所收
“中篇小说选刊奖”、“首届上海青年敦煌文学大奖”受賞
32 年越しパーティ（日訳）《人民中国》1986-8～1987-3

33 女儿经（映画）　　上海电影制片厂　　（ビデオ）
34 一点尝试—有关《女儿经》的创作谈　《中篇小说选刊》1985-4
《1985年《中篇小说选刊》获奖作品集》海峡文艺出版社1986-12 所收
35 写上海生活，写上海人—关于《女儿经》　　《书林》1985-5　　*
36 风流人物（中篇）　　《收获》　1985-6　　单行本《女儿经》所收
37 在一个古老的小镇上，有一个姑娘　《作家》1985-11　　*
38 茫茫人海　　《女作家》　1986-1
39 天空中没有留下翅膀的痕迹，但我已飞过　《文艺报》1986.3.8
《当代中国作家百人传》求实出版社1989.6　所收
40 谢谢你，帕克　　《新民晚报》1986.6.2～4
单行本《你好，帕克》所收
单行本《中国当代女作家文选》新亚洲出版 1987.3 所收
41 洪太太　　《人民日报》海外版 1986.9.29　　*
《小说月报》1987-2 転載　　*
42 当我们不再年轻的时候（中編）《文汇月刊》1986-12
《小说月报》1987-3 転載
43 “快餐式”文化　　《文学报》1986.12.25.　单行本《你好，帕克》所收
44 昨夜梦的再现　　《艺术世界》1987-4.　单行本《你好，帕克》所收
45 再见，帕克　　《文学报》1987.9.24.　单行本《你好，帕克》所收
46 摇摇摇，摇到外婆桥　《小说月报》1987-12　　*
47 签证　　单行本《签证》所收
《1986-1987《小说界》获奖作品集》上海文艺出版社1989.11 所收
48 秋天的盼望（中編）　《花城》　1988-1　单行本《女儿经》所收
49 题外的话（《女儿经》代序）　　单行本《女儿经》所收
50 我与上海滩　　《上海滩》　1988-2.　单行本《你好，帕克》所收
51 风水轮廻　　《天津文学》1988-3
52 银行家（中編）　　《文汇月刊》1988-4.《中篇小说选刊》1988-3 転載
53 关于《银行家》　　《中篇小说选刊》1988-3
54 留在天鹅阁的回忆　　《文汇报》1988.6.29.　单行本《你好，帕克》所收
55 与孩子交谈　　单行本《你好，帕克》所收
56 你好，帕克　　单行本《你好，帕克》所收
57 橙黄桔绿到中年　　单行本《你好，帕克》所收
58 啊，长城　　单行本《你好，帕克》所收

59 牧羊老人　　单行本《你好，帕克》所收
60 如意与遗憾　　单行本《你好，帕克》所收
61 骆驼草赞　　单行本《你好，帕克》所收
62 鸣沙山上的脚印　　单行本《你好，帕克》所收
63 班主任的苦乐　　单行本《你好，帕克》所收
64 这里，每个“人”字都是大写的　　单行本《你好，帕克》所收
65 童年的路　　单行本《你好，帕克》所收
66 鲜花　　单行本《你好，帕克》所收
67 老高师傅和他的巧克力生代　　单行本《你好，帕克》所收
68 面对比我们年轻的一代　　单行本《你好，帕克》所收
69 老师，您能再批阅一下吗？　　单行本《你好，帕克》所收
70 我和音乐　　单行本《你好，帕克》所收
71 春华秋实话园丁　　单行本《你好，帕克》所收
72 祝愿与友谊　　单行本《你好，帕克》所收
73 “和平天使”　　单行本《你好，帕克》所收
74 悄悄话　　单行本《你好，帕克》所收
75 重游旧地有感　　单行本《你好，帕克》所收
76 南希和我　　单行本《你好，帕克》所收
77 啊，香港！　　单行本《你好，帕克》所收
78 我的妈妈　　单行本《你好，帕克》所收
79 拳拳母心　　单行本《你好，帕克》所收
80 说说“绅士”　　单行本《你好，帕克》所收
81 当我们年轻的时候　　单行本《你好，帕克》所收
82 昨天、今天和明天　　单行本《你好，帕克》所收
83 我的一天　　单行本《你好，帕克》所收
84 当代文学四十年百人答问录·3　　《上海文论》1989-5
85 祝你生日愉快（中編）　《上海文学》1989-7.　　《新华文摘》1989-11転載
86 望尽天涯路（長編）　《小说界14期 长篇小说专辑》1989.8
87 昨天西风凋碧树—《望尽天涯路》创作笔记
　　《小说界14期 长篇小说专辑》1989.8
88 我所认识的上海　　《文学报》　1989.10.12
89 黄花无语　　《春风》　1989-10
90 谭爱梅和她的《好运道俱乐部》　　《文汇月刊》1989-11

91 谭爱梅著《三个东方女性在美国—许露丝的故事》（翻訳）
《文汇月刊》1989-11
92 供春变色壶　《钟山》　1990-1　*
93 同是异乡人　《小说》　1990-2　*
94 望不尽的人生路　《上海文学》1990-3
95 茶壶和茶叶　*
96 心曲向谁诉　《广州文艺》1991-3
97 脱不下的红舞鞋　《文学报》　1993.1.7
98 上海人眼中的梁凤仪　《上海人眼中的梁凤仪》学林出版社 1993.2 所收
99 再谈梁凤仪　《文学报》　1993.6.3
100 小插曲　《小小说选刊》1993-7

C、程乃珊関係論文

1 王若望　《蓝屋》的启示—程乃珊中篇新作《蓝屋》读后.　《钟山》83-4 *
2 牛玉秋　《蓝屋》—新作短评　《文艺报》83-10
3 陈娟　成长中的上海青年作家　《文艺报》83-11
4 欧阳文彬　扩大视野深入探索—读程乃珊作品随想　《文学报》84.1.5 *
5 毛时安　独特的生活画卷　《上海文学》84-2
6 徐启华　艰苦而幸福的新生—评程乃珊的新作《当一个婴儿诞生的时候》
《解放日报》84.4.24 *
7 曾镇南　伟大的事业是将人的素质提高的事业—论程乃珊的小说创作
《上海文论》84-5 *
8 邹平　两个金苹果："跳出来"和"走进去"
—《蓝屋》、《流逝》比较谈　《文学评论》84-6
9 曾镇南　关于程乃珊作品的断想　《萌芽》　84-7
10 冯嘉　《蓝屋》得失谈　《萌芽》　84-7
11 李子云　关于创作的通信—与程乃珊谈创作　《读书》　84-7
《昨日风景》浙江文艺出版社 91.12 所收
12 徐兆谁　从《蓝屋》到《穷街》—浅谈程乃珊的小说创作
《人民日报》84.7.23
13 林为进　康大为的人生历程—读《当一个婴儿诞生的时候》
《飞天》　84-11 *

14 张贤亮　发挥女性优势—致乃珊　《女作家》85-1

15 牛玉秋　为一个简明的真理唱赞歌—从程乃珊的三部中篇小说看她的创作思想
《当代作家评论》85-2

16 马秋芬　美在晶莹处—青年女作家程乃珊印象记　《小说潮》85-2　*

17 马林　程乃珊印象记　《文汇月刊》85-3

18 王若望　一幅上海风情画—评程乃珊《女儿经》　《文汇月刊》85-7

19 徐俊西　走出狭弄以后—首届上海文学奖获奖小说述评
《解放日报》85.8.18*

20 金丹、张立行　程乃珊和她笔下的上海风情　《光明日报》86.1.4

21 董德兴　上海滩风俗画—程乃珊的都市风情小说漫笔.　《社会科学》86-1

22 金志华　为社会更趋完善而奋笔—程乃珊创作思想浅窥
《当代文艺探索》86-4*

23 曾文渊　八十年代上海风情—读程乃珊的中篇小说　《小说家》86-6

24 花建　从泛悲剧感到喜剧感—论程乃珊小说的美学特色
《文论报》86.9.21*

25 斯群　一幅点型的上海风俗画—《女儿经》读后
《1985年《中篇小说选刊》获奖作品集》海峡文艺出版社86.12

26　详论《女儿经》　《当代文学报》88-1　*

27 苏冰　程乃珊小说摸式解析　《小说评论》88-5

28 余峥　她在建构一座独特的文学立交桥—程乃珊《秋天的盼望》谈片
《当代文坛报》88.5+6

29 岩佐昌暲　復活した資本家サロン（中国社会の内景⑪
—文学作品に見る中国）.　《西日本新聞》88.6.14

30 胡河清　程乃珊的“俗”　《文学由谈》88-6
《中国现代当代文学研究》89-3転載

31　长篇《望尽天涯路》受到好评　《文艺报》89.10.26

32　程乃珊创作上的里程碑—长篇小说《望尽天涯路》讨论记要
《文艺报》89.11.16

33 左泥外　关于《签证》
《1986-1987《小说界》获奖作品集》上海文艺出版社1989.11

34 谷泥　从程乃珊站柜台卖书想到……　《文艺报》89.12.7

35 花建　从程乃珊的创作历程想到的　《文艺报》89.12.14

36 谷苇　写不完的「上海滩」—访女作家程乃珊　《文艺报》89.12.21

37 戴翊　民族资产阶级家族生活的画卷—读长篇小说《望尽天涯路》
《文艺报》89.12.30

38 戴翊　向着心态的深层掘进—程乃珊小说论
《新时期上海作家论集》上海社会科学院89.12
《新时期的上海小说》上海社会科学院92.6

39 花建　金融阶层的三个世界—评长篇小说《望尽天涯路》
《社会科学》90-5.　《中国现代当代文学研究》90-7 転載

40 徐明旭　昨天不再来—读程乃珊的长篇《望尽天涯路》.《小说评论》90-5＊

41 公孙树　程乃珊赴港之前　《文艺报》91.3.28

42 李子云　大陆的琼瑶—程乃珊　《昨日风景》浙江文艺出版社91.12

43	程乃珊	《中国现当代文学辞典》辽宁教育出版社	89.2
44	程乃珊	《当代作家百人传》求实出版社	89.6
45	程乃珊	《中国现当代女作家传》中国妇女出版社	90.3
46	程乃珊	《中国文学大辞典 8》　天津人民出版社	91.10
47	程乃珊	《中国当代青年作家名典》中国华侨出版公司	91.12
48	程乃珊	《中国文学家辞典 现代 5》四川文艺出版社	92.7
49	《天鹅之死》	《中国文学大辞典 2》　天津人民出版社	91.10
50	《蓝屋》	《新时期小说百篇评析》南开大学出版社	85.10
51	《蓝屋》	《中国当代文学手册》　湖北教育出版社	88.5
52	《蓝屋》	《中国现当代文学作品辞典》北京大学出版社	90.12
53	《蓝屋》	《中国文学大辞典 8》　天津人民出版社	91.10
54	《女儿经》	《中国现当代文学作品辞典》北京大学出版社	90.12
55	《丁香别墅》	《中国文学大辞典 2》　天津人民出版社	91.10
56	《当我们不再年轻的时候》	《中国现当代文学作品辞典》北京大学出版社	90.12